

平成21年度第2回高津区区民会議（摘録）

日 時 平成21年9月15日（火） 午後6時00分～午後8時30分

場 所 高津区役所1階保健ホール

1 出席者

- (1) 委員 伊中委員、大内委員、岡野委員、長村委員、木村委員、小島委員、金委員、佐藤委員、島崎委員、鈴木委員、宗田委員、瀧村委員、富田委員、浪瀬委員、長谷川委員、平澤委員、横山委員、吉崎委員、吉田委員、若林委員
- (2) 参与 猪股参与
- (3) 事務局 区長、副区長、総務課長、企画課長、地域振興課長、区民サービス部長、橘出張所長、保健福祉センター所長、保健福祉センター副所長、こども支援室長、建設センター所長、市民税課長、地域振興課主幹
- (4) 関係者 総務局危機管理室室長、地域防災推進主幹
- (4) 傍聴者数 5名

2 次第

- (1) 開会
- (2) 議事
 - 1 企画運営会議における審議状況について
 - 2 「地域防災とコミュニティ」について
 - ・現地調査結果について
 - ・その他の取組について
 - 3 「環境まちづくり」について
 - 4 たかつ区民会議フォーラムについて
 - 5 今後のスケジュールについて
 - 6 その他
- (3) 閉会

1 開 会

吉崎委員長及び山崎区長あいさつ

2 議 事

- (1) 企画運営会議における審議状況について
資料1により小島副委員長から説明。
- (2) 「地域防災とコミュニティ」について
 - ・現地調査結果について
資料2、資料3により事務局から説明。

吉崎委員長 「視察から明らかになった課題・解決に向けた取組」を中心に審議をしていただければいいと思う。「解決に向けた取組」として、第2期の残り期間内に実施するもの、第2期区民会議の提言としてまとめていくものがあると思うが、地域防災とコミュニティというテーマのまとめに向けた意見をいただければと思う。

浪瀬委員 幾つかすぐに改善できるようなところは、行政のほうですぐ直していただいて感謝する。

倉庫内のリストを作るが、区全体で何があるかわかるようなものはこのアイデアに入っているのか。自分のところにはないが、どこに行けばあるかがわかるようになっていると良いと思った。

段ボールに中身を明示すると書いてあるが、この間各倉庫に行ったとき、一般に使わないような用語で書かれており、何が入っているのかよくわからなかった。普通の言葉で提示していただくと非常にわかりやすい。

掲示場所についても、慌てて倉庫に入ったときにも見つけやすい場所へ掲示することが必要である。

分散備蓄は、物によって分散すると役に立たないものがある。例えば、ミルクは何々倉庫に行くかとあるとわかれば、いざというときに安心できる。

これに伴い、動き初めの音頭を誰がどうとるかをシミュレーションしていく必要があると感じた。

岡野委員 総務局と各区の責任分担はどうなっているのか。行政の中で備蓄倉庫を管理する組織はないのか。あれば、当然もうやられているようなことをここで議論しているような気がする。何かおかしいのではないか。

佐藤委員 現実を見て、今までそれぞれの備蓄倉庫にどれだけのものが入っているのか、誰が管理しているのか、そのチェックは毎年どのようにやっているのか、その辺が見えてこない。今回調査をしてみて、住民が初めてわかった事実もいっぱいある。最終的には行政側で確認したというが、そういうことをやってきていない状況で、今すぐに地域の防災ネットワーク連絡会議にお任せといっても、なかなか難しい気もする。後ほど行政からお答えをいただきたい。

実はこういうふうに来てきたが、地域の防災ネットワーク連絡会議との関連性がうまくいってなかったという実態論があるのか。そうであれば、その関わり方をきちっとしないと難しいと思う。そういうことが一切なく、防災倉庫だけ今まで行政が管理してきたのか。

若林委員 危機管理室からもう少し突っ込んで回答をもらったほうが良かったのではないか。高津区の罹災者何人か、その数の食料が2食分あるかどうか。粉ミルクはどこ倉庫にあるのか。備蓄品は勝手に移動しているわけではないと思う。そうであれば、どこに何が幾つあると明確に出ると思う。こんなあいまいな回答をここで出してもらいたく

ない。スポーツセンターの貯水槽はその役目を果たしているのか。高津中学校の端子に発電機をつけ電気をつけるのは、災害時はいいが、通常電気もつかなければ点検できない。その辺まで突っ込んで聞いてもらいたかった。

事務局 基本的な備蓄倉庫の管理のあり方、危機管理室と区役所の役割分担等は、個別に色々説明したつもりではいた。地域防災計画の中にきちんと役割分担が書いてある。それに則って行政は動いている。

その上でああいう現状だったことを区民会議としてどう評価し、今後、それをどうやってより良い方向に改善していくかが議論のポイントである。行政はやるべきことはきちんとやるので、その前提で、地域の中で何をすべきか、何が足りないから、自分たち自身がどこをどうすべきかを議論していただいたと思っている。本日、危機管理室から室長と主幹が来ているので、行政側に質問が集中している感じであるが、事務局としては少し残念だという気もしている。

備蓄倉庫は全市の考え方の中で分散備蓄としている。備蓄倉庫の維持管理、物品の調達、入れかえは、危機管理室が全市的な立場でやっている。発災時には、区本部の区長権限で別途その物資を動かしたりすることができるかと説明している。マニュアル、地域防災計画で市と区の役割分担はできているが、万全ではないので、その上で議論していただくということになると思っている。

瀧村委員 高津区にある備蓄倉庫はオール川崎を前提に置いてあるということであるが、高津区に必要なものを置くことは早急に可能か。可能であれば、それを重視していただきたい。この地区では何を望んでいるかを行政と住民で意見交換して、幾らかでも必要なものを備蓄してもらえればいいと思う。何が何でもオール川崎の備蓄品だという考えは変えることができるのか。

横山委員 分散備蓄という考え方が本当にいいのか。地域の現状に合わせてと言ったとき、分散備蓄と全体的な状況とどう調整していくのが鍵になるのではないか。その辺の全体構造が明確にならないと、これからどう具体案を検討していくのか筋道がはっきりしてこない。

富田委員 高津の防災システムをどういうふうにか考えるかを議論しなければいけないので、備蓄倉庫を見たときに、内容がどうだったというのは後の話だと思う。防災ネットワークを機能させなければいけないと思ったとすれば、どうすれば機能するのか、避難所運営会議はどうしたらいいのか。いざ何かが起こったときに、どうそれに立ち向かっていくのかの議論がまずあって、各区の判断で備蓄品は使用できると言っているが、具体的にどうしていくのか。その辺のイメージを実際につくり上げていく方向性をまず確認する必要があるのではないか。

島崎委員 分散備蓄の考え方は半分ぐらい理解できるが、実際に震度5以上の災害があったとき、市の災害対策本部で備蓄倉庫から備品を運び出したり、地域のあちこちに分配

できるのかを考えると疑問を感じる。そこが分散備蓄という考え方を理解できない一番大きな要因ではないか。備蓄倉庫の中に入っている最低限のものは、地域の方々が災害直後に使える状況が必要ではないか。また、そういった形ができなければ、災害が起きたときに使えないと批判的になるのではないかと思う。地域に根差した考え方を示していただければと思う。

岡野委員 分散の仕方には機能別分散と量的分散の2つがある。ミルクは量的分散をしておかないと何の意味もないのは当たり前のことである。そういうものを何で今の分散の仕方をしているのか非常に疑問がある。きちんとした組織があって検討していればわかる。市民が知恵を絞ることなのか。

吉田委員 今回、倉庫を回って、町会の人たちもそこにあることすら知らなかったことを周知できたことは非常に有意義だった。今後はどうやってそれを活用できるのか。その辺も考えなければいけない。

木村委員 市民は、自分の近くの備蓄倉庫にあるものは、その地域の人が使えるものだと思っている。ここからほかへ持っていくなれば、災害時はトラブルのもとになる。分散備蓄は地域住民のことを先に考えてやっていただきたい。

スポーツセンターの200トン水槽は、ほかのことでトラブルが起きて、あそこへ教育委員会がつくった。10年も水を入れかえていないので、飲み水には適用しない。常に飲料水にできるとポンプも稼働できるようにしてもらったはずであるが、災害時のためにつくったものが使えない。これは何の意味もないを考えると、分散備蓄と同時に、貯水槽がどこかほかがあれば、そういったものを含めて考えていただきたい。

吉崎委員長 川崎全体で分散備蓄をすること自体が疑問だというのが今までの意見の中で多いように思う。

横山委員 各区の判断でその備蓄品は使えるという回答にもかかわらず、分散備蓄というのは矛盾しているのではないか。鍵を各区と地元を持たせるという状況がこれから出てくるのであれば、各倉庫の備蓄品についてもある程度揃える必要があるのではないか。

危機管理室 分散備蓄を始めたのは阪神・淡路大震災が契機である。それまでは基本的に各区に備蓄倉庫を1カ所ないしは2カ所と、南部防災センターに備蓄をしていた。阪神・淡路大震災では、学校が必然的に避難所になった経過があって、各学校の空き教室に必要最小限の備蓄をしていたというお話を聞いている。川崎市も51校の中学校を地域防災拠点と位置づけている。高津区では5中学校に平成8年、9年で必要最小限となる食料品と工具類を備蓄した経過がある。その後、川崎市は人口が増加し子どもも増えている。それと、学校の教育の方針が少人数指導に変わった。秋に次年度の中学校入学予定生徒数の調査をするが、定数が出てくるのが年明けぐらいで、その時点で急に備蓄倉庫を教室に転用するので出ていっていただきたいという話が浮上するケースがここ5～6年ずっと続いている。高津区は、5校すべての中学校に備蓄倉庫があったのが今は2校

になっている。そういう状況の中で色々な資材があちらこちらへ移動している。

また、倉庫の広さについては、学校の敷地の形状等にあわせて可能な平米数も違ってくるといふ現状にある。

分散備蓄の考え方であるが、スタート時点では必要最小限のものを各中学校の教室に入れさせていただいた。高津区で何万人罹災者が出るので、その分を備蓄するのが基本的なことだと思うが、物理的に備蓄倉庫の設置が追いつかない状況がある。備蓄品については発災直後に地域の皆様が使っていただいても結構だと思うが、場所によって量が少ない多いがある。学校に置いてあるものは必要最小限なので、あとは津田山の緑ヶ丘霊園にある倉庫、建設センター、区役所、スポーツセンターから運ぶ。あとは、今までスーパー、百貨店と協定を結んでいたが、さらに生協と結んで、発災当初すぐ必要となるものを調達できるソフト的なものを考えている。

その管理のあり方は、備蓄倉庫が各中学校に1カ所ぐらいあれば、地域の皆様に備蓄の出し方とか考えていただく。市と区の備蓄の管理方法も検討しなければいけないが、物理的に倉庫がある程度できた段階で配分等もまた考えていかなければいけない。

川崎区では既に倉庫の鍵を地域に渡している。区と地域の皆様方である程度ルールをつくっていただければ、危機管理室では鍵を預けて、中をもう1回見ていただいて、ここはまずいというところがあれば色々ご指摘いただきたい。

吉崎委員長 市単位で考えるより、区単位で考えて良いということか。区で必要なものを要求したら、市はそれを補給すると。

事務局 それについては予算的な問題もあるため、時間をかけて検討する必要がある。

横山委員 分散備蓄の理解が全然違っていた。例えばお茶ならお茶が冷蔵庫にいっぱいあって家にはないという分散の仕方だと思った。

危機管理室 引っ越しでがたがたしてしまって、区役所にいろいろやっていただいたのはあるが、すぐ使えるような形に管理できなかったのは本当に申しわけないと思っている。

横山委員 分散備蓄は、川崎市内にいろいろ分散して倉庫を持っているという意味か。

吉崎委員長 そういうことである。

横山委員 違うものがそれぞれ偏っているということを聞いている。

富田委員 それが現実であるが、区の現状に合わせて、管理もできる体制さえできれば、それぞれ移動させても構わないと言っている。それは100%問題ないのか。

危機管理室 基本的に地域の皆様の中で合意がとれていれば構わない。ここの学校はトイレだけで良いということであれば、それはそれで良い。

吉崎委員長 任せてくれれば、区も地域の人もその防災倉庫について管理を一生懸命やるが、今は手を出せない雰囲気になっている。分散備蓄の考え方は理解できたとして、今度は管理をどうするか意見を聞きたい。

瀧村委員 いざ備蓄倉庫の鍵を預けるから管理しろと言われると、一人では荷が重い。2

～3人で鍵を保管して、いざというときには集まって一緒に開けるのが良い。

若林委員 鍵は避難所運営会議に任せるような形になるのではないかと。別にまた持たせるのか。

富田委員 そこは我々で話し合っただけで決めれば良いだろう。今まで防災ネットワーク連絡会議、避難所運営会議が機能しなかったのは、そこに関わるリーダーの責任もある。それは反省しているが、今言ったような形でやっていくことになれば、活性化させるチャンスだと思う。

横山委員 今まとめてくれたような形で進むことは非常に良いことだと思うが、先ほどの危機管理室の話は分散備蓄の考え方についての大きな変化である。川崎市全体の中で計画があるので、各区の実情とか地域の実情は2次的に置いたプランがあるという思いだった。今の話は高津区が区でもっと真剣に考えて取り組んで良いという話なので、色々工夫もあるのではないかと。

高津区の場合、防災の取り組みが宮前区とまたがっている地域とか、多摩区との関係とか、色々な関係が出てくる。そういうところは行政区を通して連携を図っていくことにもなるので、もう少し広い視野も求められてくると思う。区ごとにやって良いとはっきり共通認識を作らないと、今まで考えていたものと大きく変わるという感じがする。

吉崎委員長 管理をだれに任せるかという問題になってくると、高津にするのか、宮前にするか、境界のところある部分は難しいと思うが、どっちかと決めてできると思う。

富田委員 他区にまたがる部分は、危機管理室と各区の担当課で調整をしっかりともらいながら進めれば良い。

横山委員 住人の使い勝手のいいような形で宮前区のほうでも取り組むという運びになっていけば、地域の連携ももっと密になっていくことも可能ではないかと。

吉崎委員長 備蓄倉庫を見ただけでこれだけの発言が出るのは、10年間何をしていたのか。今、地震が来たらどうしようもない現状だということも一番良くわかったのではないかと。

企画運営会議で意見を整理し、今後の対応を検討していくことを了承。

・その他の取組について

資料2、資料4、資料5、資料6、資料7により事務局から説明。

吉崎委員長 あったかつうしん、中学生の災害ボランティア体験に出席された方から発言いただきたい。

金委員 中学生の災害ボランティア体験をやるに当たって、緩やかな連携があったと言える。中学生がいざ災害のときには役に立つ存在であると提案していたが、市民館、社会福祉協議会と連携していく中でこれができていった。いろいろ人がこれに関わったこのやり方がすごく良いかと思う。みんなにこにこしながらやっていて、これを継続させて

いく1つのヒントになったと思う。来年もつなげていきたいが、今回のこの結果を踏まえて、緩やかな連携を何とか考えていく。

大内委員 女性ぼうさい座談会に参加して、若い世代のお母さんたちは、地域に自分たちを気にしてくれる方がいることを知らなかったとすごく感じた。そういう交流を持つことが地域コミュニティにもつながっていくのではないかと感じた。

講演では、家の中で死なない工夫が必要という言葉にすごく気づかされた。家は安心する場所であるが、地震になったときには一番危険な場所でもあると感じた。大きな家具が倒れてこないために、お金をかけなくても防ぐ方法があると教わって、参加してためになる講座であった。若いお母さんたちも、防災と聞くと、お金がかかると思っていたらしいが、このお話を聞いて何かちょっと意識が変わったみたいな感じで、続けていけたら良いと思っている。

今回の座談会の様子も、「あったかつうしん」で特集記事となっているので、お母さんたちには伝わっていると思う。

吉崎委員長 体験することはすばらしいことである。特に人と人の連携がどんどんできたことはよかった。

横山委員 災害ボランティアでは、参加した中学生が非常に元気だったことと、複数の中学校の生徒が参加して、中学校の壁を超えていて仲よくしているのは非常に印象的だった。

吉崎委員長 地域コミュニティ施策推進事業では、蟹ヶ谷自治会が地縁型で対象になる町会であるが、何か意見はあるか。

長谷川委員 特に意見とか要望はないが、役員会を見せさせていただきたいと業者の方と地域振興課の方が来た。なかなかよくやっているという感想をいただいた。その後ミニ運動会の実行委員会も参考にさせてほしいということで、長時間にわたっての意見交換とかそういったものを見ていただいた。そのまとめを今後参考にして事業を進めていきたいということだった。

吉崎委員長 地縁型の良いところも見せなければいけない。良いところをつくって見本になっていただければありがたい。

(3)「環境まちづくり」について

資料8、資料9により事務局から説明。

吉崎委員長 個人とグループ両方で20、13、9と応募があっただけでほっとしている。

(4) たかつ区民会議フォーラムについて

資料10により事務局から説明。

吉崎委員長 講師を誰にするか。フォーラムそのものが防災意識を高めるきっかけをつく

ることを基本でやりたいと思うので、その辺に合ったような講師になれば一番いい。20ページの講師の話聞いた人はいるか。

小島委員 聞いたことはあるが、どなたがどうだったか記憶にない。

金委員 テーマについて、地域連携と話しているが、機能する運営会議はどういうものができればいいのか。どういうつながりがあれば、そういうものが機能していくのか、そういう優しい話し合いをしていただければと思う。

横山委員 先日、NHKの「ご近所の底力」で地域防災のテーマを取り上げて非常におもしろかった。地域の実情に合った形の取り組みのイメージがわくようなパネルディスカッションなり講演ができれば良いと思う。

吉崎委員長 これならやってみようという気になるのが一番良いと思う。講師についてはどういう人かは別として、こういう講師が欲しいと意見を言っていただければ一番良いと思う。

富田委員 パネラーに避難所運営会議のほうからとあるが、避難所の運営がわかりやすく具体的な部分が出るのが一番だと思う。もう1つ、阪神大震災の避難所の現実的な姿を把握しながらお話をいただければ、かなり参考になる。

横山委員 防災アンケートの回答が26町会と話があった。地域に密着して活動している自主防災組織に参加していただけるような働きかけはしておかなければという感じがする。

吉崎委員長 アンケートの報告が出ないところが一番問題になる町会である。特にマンションは無関心なところがある。我々のPRでどんどん広げていくしかないと思う。

講師は本日の意見をもとに事務局で調整することを了承する。

(5) 今後のスケジュールについて

資料11により事務局から説明。

今後のスケジュール（案）を了承。

(6) その他

当日配付資料により事務局から説明。

吉崎委員長 新型インフルエンザ対策について区全体に周知するためパンフレットを出しているのか。

事務局 パンフレット自体結構高いもので、皆さんに配るわけにいかない。新型インフルエンザに関する講習会は色々な場所で開催している。依頼していただければ、時間の都合がつく限り広報していきたい。情報類は区役所の入り口などに掲示して情報周知に努めている。

吉崎委員長 これからどういうふうな形で猛威を振るうかわからないが、事前の手をきちっとやっていただきたい。

浪瀬委員 「都市型コミュニティの可能性を探る」は、川崎市自治基本条例検討委員会の有志が年に1回フォーラムを開きながら、自分たちがかかわった条例のその後を検証しつつ、使っていく条例になるようにと手弁当でやっている私的な会である。今年が高津市民館の市民自主企画事業に提案し、都市型コミュニティの可能性を探るというフォーラムをやりたいと思っている。我々が今暮らしている川崎市高津区でのコミュニティの新たな連携をつくったり、安心をつくったりという可能性を探るということで企画した。

今回は、川崎市の都市型コミュニティ検討会の座長、法政大学の武藤先生に問題提起ということでご講演いただく。その後、地域のコミュニティをちょっと変わった形でチャレンジをしている4人の方たちに登壇していただき、地域の中で連携していくヒントのようなものが出していけたらと企画した。

吉崎委員長 川崎は細長いので、区によって実情が違う。その中でどういう形で生きていくか。大事なことなので、参加できる方はできるだけ多く参加してほしい。

猪俣参与 今日は議会と重なり、私一人になってしまったが、活発な議論を聞かせていただいたので、議会のほうでもまた生かしていきたい。

3 閉 会

富田副委員長あいさつ